



# とらいあんどる



2014 年 6 月

一音会ミュージックスクール発行

## 「苦手をいかす」

先月の「とらいあんどる」で、私が苦手な運動に、どう取り組んできたか、書きました。

私の苦手に対して、母は、「いいじゃないの、できなくて」という人でした。

「人間、できないことがあるのは、しかたがない」。「苦手を人並みに近づけるよりは、得意なことをさらに得意にしたら良い」。「やっていて楽しいことが、得意につながる」。

それが、私の母の哲学でした。

実は、この話には、続きがあります。

当時、小学校低学年の私は、母の言葉にすっかり納得し、好きなことを、たくさんがんばるようにしました。

当時、私の好きなことは、絵を描くことでした。絵といいますが、落書きのようなものです。

私は小学校から帰ると、ずっと絵を描いて、遊んでいました。絵は何時間、描いていても、飽きません。

すると、それなりに上手になってきます。“好きこそものの上手なれ”とは、よくいったものです。

周りからも「アヤコちゃんは、絵が上手」と、ほめられるようになりました。

学校行事のプリントの挿絵やポスターをまかせてもらえたり、絵のコンクールで賞をいただいたりもしました。

「絵の上手な子」としての地位を得て、当時の私はコンプレックスから解

放されたかのように、はればれとした気持ちになっていました。

しかし、成長するとともに、私はまた行きづまるのです。母の哲学に、納得がいかなくなっていました。

私は小学校高学年になっていました。

絵は、それなりに順調に上手になっていきましたが、運動は苦手なままでした。

いくら絵が上手になっても、運動はできるようにはなりません。あたりまえです。

そんな状況を不満に思うようになっていったのです。

苦情の窓口は、いつものように母です。

母にうったえます。

「お母さん、私、運動ができるようになりたい！」

すでに長年のテーマとなっていますが、母の対応は、ほぼ変わっていません。

「そ〜お？」

「お母さんが、得意を伸ばすべき、っていうのは分かるの。だから得意なことを、がんばるのは良いと思う」

母は、仕事の手を止め、私に向き直り、いいます。

「アッちゃんは、本当に絵が上手だ

ものねえ」

私は、「ここでごまかされてはならない」と、こぶしをギュッと握ります。

「今日こそはいうぞ」と、一歩、ふみこみます。

「でもね、でもね・・・、私は絵なんか得意じゃなくていいの！ 運動ができるようになりたいの！ 他のことじゃ、ダメなの！ 運動ができるようになりたい！」

母は、私にいいがかりをつけられることに、慣れていきます。ニコニコして、黙ってきいています。

「いくら絵が上手になったって・・・いくら他に得意なことがあったって・・・運動ができないことには変わらない。そんなの、イヤだ！」

母は、まだ何もいいません。

「みんな・・・みんな・・・私が運動ができないと・・・『アヤコちゃんは、運動はできないけれど、他に得意なことがあるからね』って、いう。すぐ、そういうなぐさめをいう。でも私は、運動ができなくても、絵が上手だからいいなんて、思えない。だって私は、運動ができるようになりたいんだもの！」

気がつくのと、私は泣いていました。涙が、あとからあとから、あふれます。

何の涙なのか、自分でも分かりません。

母は、まったく動揺することなく、黙ってきいています。

母が何もいわないので、私はさらにいい続けるはめになります。

「他に得意なことがあるから、なんていうのは、できないことの言い訳になってない！ ごまかしだ！ 負けおしみだ！ 私は、できないからといって、負けおしみをいいたくない！」

母は、まだ黙っています。

私は、いいたいことをいい終わってしまったので、黙るしかなくなってしまうました。

それでも母は、何もいいません。

二人、むかいあったまま、時間がたちます。

突然、母が明るくいいました。

「悪いけれど、お母さんね。若い頃、運動、好きだったの！」

場違いに明るい母の表情に、私はあっけにとられます。

また突然、母は表情を変え、たいへん厳しい表情になります。

「今は、運動どころか、歩くこともできないわ。一人で立つこともできないわ。ある日、突然やってきた病気のせいで、身体が、全然、動かなくなってしまったの・・・」

私は内心、「そうだった！」と、頭をなぐられたようなショックを受けていました。

私にとって、母の障害はあまりにも日常であり、あたりまえのものでした。

母の身体が不自由であることを、その瞬間まで忘れていたのです。

私は、何年にもわたって、その母に「運動ができない」という愚痴をきかせ続けてきたのでした。

私は、自分の愚かさに、消えてなくなりたい気持ちでした。

すぐに母に謝って、その場を立ち去りたくくなりました。

その気配を察した母が、「ここからが大事な話！」と、先制します。

「お母さんね、もし病気をしていなかったら、どんな人生だっただろう、って、よく考えるの。想像できるわ。お母さんは、身体を動かすのが好きだったの。運動も好き。正直にいうと、ピアノが好きだったのは、ピアノにスポーツのような魅力も感じていたからだよ。若い頃は、力もあって、スポーツ選手のような身体だった。よく動いて、よく食べたわ。餃子は一度に60個、食べたことがあるわ」

そういって、少し笑います。

母は、遠い目をして、続けます。

「きっと、音楽大学に勤め続け、早朝から夜まで、やれレッスン、やれ試験・・・すきま時間はすべて、自分の練習に使ったでしょうね。実際、病に倒れるまで、そういう生活をしてきたわ。忙しかったわ。学生さんのレッスンがのびて、お昼時間がなくなって、立ったまま、お昼を10分で食べて、食べ終わったら走って、午後のレッスンに向かったわ。毎日、目がまわるほど、忙しかった。演奏家として、あちこち飛びまわってもいたでしょうね。そんな動きまわる生活をしていただろうということは、簡単に想像ができるの。だって身体を動かすの、好きだったんだもの！」

母は、そこで話を区切って、私の顔をのぞきこみました。

母の目は、「お母さんが、何をいおうとしているか、分かる？」と、問うていました。

私は、首をふって、降参を示します。

母は、私の顔をまっすぐ見ます。

「1つ、はっきり分かることがある。それは・・・そういう生活を続けていたら、お母さんは『江口メソード』を作っていなかった」

私の顔に驚きが浮かんだのでしょう。母は、満足そうに大きくなづいてか

ら、繰り返します。

「動きまわる人生では、『江口メソード』をあみだすことはできなかったのよ」

母は、一転、また気楽な口調に戻り、私にたずねます。

母「アッチちゃんは、すごく難しいことを考える時、どんなふうになっている？」

私「えっ！　どんなふうって・・・ふつうに・・・」

母「走っている？」

私「まさか！」

母「ジャンプしている？」

私「してないよー」

母「じっとしているでしょう？」

私「うん」

母「人はね、身体を動かしている時は、頭が止まっているの。頭を動かしている時は、身体が止まっているの」

私「そうなの！？」

母「じゃあ、難しい問題をとく時・・・たとえば、何桁もの割り算を暗算でやってみることを想像して。それを全速力で走りながら、できるかしら？」

私「できない！」

母「じっとして、考えたいと思うでしょう？」

私「うん！」

母「人間って、おもしろいものでね、身体を動かしている間には、深く考えることができないの。ただ丸暗記するとか、そういう浅い頭の使い方じゃなくて、深く深く考える時、人はじっと動かないものなのよ」

母が私に何を伝えたいか、少し分かってきました。

母はいいました。

「お母さん、病気をして、一步も歩けなくなったの。24時間、毎日毎日、じっとしていなければならなくなった。じっとしている時間が、健康な人の何百倍、何千倍になってしまったわ。考える時間が、たくさんできたわ。深く考えるには、ぴったりの境遇だったともいえるの。それまでの動きまわる人生だったら考えないようなことを、たくさん考えたわ。あることを思いついたら、それをもっと深く、もっと深く、考えを深めていったわ。そうしてたどり着いたのが『江口メソッド』だったのよ」

私はまた、泣いていました。数分前に、「運動ができるようになりたい！」と泣いて泣いた涙とは、まったく違う涙でした。

「お母さんね、『病気になって良かった』なんて、たとえ負けおしみでも、

いえないわ。そういうには、あまりにも過酷な病気だったから。でもね、動けなくなったからこそできるようになることもあるって、思わない？」

私は、涙で声が出せず、ただうなづいていました。

「アッチちゃんが、身体を動かすのが苦手なら、それはチャンスかもしれないわ！ 身体を動かすのが苦手だったら、かわりに頭を動かさなさい。より多く、より深く、考えるのよ」

ようやく母の哲学が分かった気がしました。

苦手は克服するものではない。

他の得意なことで、苦手をごまかすのでもない。

苦手を逆手にとり、苦手をいかすのだ、と。

(江口 彩子)



## ◆リハーサル・トライをおこないます

夏の「ピアノ発表会」が近づいてきました。今年も例年通り、「リハーサル・トライ」をおこないたいと思います。

「リハーサル・トライ」とは、普段のレッスンのほかに、人前で演奏したり、グランドピアノで演奏したり、別の先生に見てもらったりすることで、演奏にみがきをかけるためのものです。

発表会でピアノ演奏予定の生徒さんは、無料でお受けいただくことができます。

今年は、昨年と同じように発表会方式をおこないます。その時間帯をご希望くださった生徒さんの中でミニ発表会をします。ベテランの先生がかならずつきそい、進行にあたります。もし演奏に改善点があった場合には、担当の先生に直接、連絡をします。生徒さんご本人に直接伝えて、混乱させることはありませんので、ご安心ください。

発表会の舞台に上がる前に、知らない人の前で演奏したり、いつもと違うピアノを弾いてみたりする経験は、心を強くします。緊張を体験し、自信をつけて、本番にのぞんでいただきたいと思います。

特に、普段のレッスンでアップライトピアノを弾いている生徒さんにとっては、本番と同じグランドピアノで弾く機会は必要です。ピアノの大きさに圧倒されて、頭が真っ白になってしまった、というケースが、過去にはありました。

「リハーサル・トライ」の場所は、基本的には「ヘンデルはうす」1階103または2階204のお部屋を予定しております。

各曜日に、「リハーサル・トライ」の時間帯をもうけますので、ご都合の良い日時をお選びになって、お申し込みください。お申込み〆切は6月22日（日）です。詳しいご案内は、「発表会のお知らせ」の中に、折りこんでありますので、ご覧ください。ご不明な点は、本部まで直接、おたずねください（03-5966-7711・担当：伊藤、矢島）。

## ◆「ピアノ発表会」が近づいてきました

今年のピアノ発表会は、下記の通りです。

8月1日(金)・2日(土)・3日(日)・4日(月)  
かつしかシンフォニーヒルズ アイリスホール  
(京成青砥駅より徒歩5分)

現在、「2014ピアノ発表会のお知らせ」を、お配りしています。中に、「ピアノ発表会・申込み用紙」が入っていますので、ご記入ください。レッスンの際に、「ショパンはうす」受付でご提出いただくか、担当の先生にご提出ください。本部にFAXしていただくのもけっこうです(本部FAX番号:03-3957-8864)。

ご提出の〆切は、6月22日(日)です。

この用紙は、お手数ですが、ご参加になれない方にも提出していただきます。過去に、申込み用紙をお出しになっていない生徒さんを不参加としていたところ、用紙を提出し忘れていただけだった、ということが多くありました。そういった事態を防ぐために、不参加の場合にも、念のため、その旨の意思表示をいただきたいと思っています。お手数ですが、ご協力をよろしくお願いいたします。

申込み用紙には、参加希望日も書いていただくようになっています。できるだけ、ご希望にそうようにいたしますが、例年、曜日によって、ご希望人数が極端に違ってしまうことがありますので、個別にご相談の電話をおかけすることがあります。どうぞご理解ください。



## ◆発表会費の引き落としについて

発表会費は、7月28日（月）の8月分お月謝引き落とし時に、お月謝と一緒に、お引き落としさせていただきます。よろしくお願いたします。

## ◆使わない足台をご寄附ください

教室では、たくさんのピアノの足台を使っていますが、意外と故障しやすく寿命が短いため、たえず購入し補充しています。

もしご家庭で、お子さまの成長にともない不要になった足台がございましたら、ぜひ教室にご寄附ください。一音会本部あてに、送料着払いでお送りいただければ、たいへんありがたいです。大切に使用させていただきますので、どうかよろしくお願いたします。



\*\*\*\*\*

スクールの生徒さんのご質問を、以下の2つの方法で受け付けています。

メール：[1000@ichionkai.co.jp](mailto:1000@ichionkai.co.jp)

電話：03-3954-9999

- \* お電話での質問時間は、毎週水曜日の午後7時半～9時半です。ただしレッスンがお休みの日は、質問もお休みとさせていただきます。
- \* ご質問は、多くの方のご質問にお答えするために、お1人10分を目安とさせていただいています。ご了承ください。